

I 結核発生動向の概要

結核発生動向の概要

大阪市の全結核罹患率（人口10万対）は、1999（平成11）年107.7から2018（平成30）年29.3まで減少した。一方全国の罹患率は1999（平成11）年34.6から2018（平成30）年12.3まで減少していた。大阪市の喀痰塗抹陽性肺結核罹患率は、1999（平成11）年34.7から2018（平成30）年12.2まで減少し、全国の罹患率は1999（平成11）年11.4から2018（平成30）年4.6まで減少していた。全結核罹患率・塗抹陽性肺結核罹患率ともに、全国と比べ大阪市の方が減少率は大きかったが、それぞれ2.4倍、2.7倍と依然として高い状況が続いている。

結核死亡率（人口10万対）をみると、1999（平成11）年6.9から年々減少していたが、2010（平成22）年以降は増加に転じた。その後、2013（平成25）年4.8をピークに再び減少傾向となり、2015（平成27）年は3.4であった。そして、2016（平成28）年からは再び増加に転じ、2017（平成29）年4.6をピークに2018（平成30）年は3.8と再び減少した。高齢者結核の割合が多いことが原因の一つと考えられるが、変動が大きく今後の動向をみていく必要がある。

大阪市では2016（平成28）年から、70歳以上の結核患者の占める割合が52.8%になり新登録結核患者全体の半分を超え、2018（平成30）年も51.9%で全体の半分を超えている状況である。大阪市および全国ともに、結核患者の高齢化が進んでいる。

年齢別罹患率をみると、大阪市の2018（平成30）年は、60歳以上から罹患率40を超えており、80歳以上の罹患率が98.9と最も高く、全国と比較すると、特に60歳代、70歳代の罹患率が高く、それぞれ4.6倍と3.3倍であった。

大阪市24区の罹患率をみると、2011（平成23）年に西成区においてはじめて200を下回り、2018（平成30）年は134.8まで減少したが、依然として24区で最も罹患率が高かった。引き続き、結核健診による患者の早期発見と確実な治療が重要である。

外国生まれ結核患者数は、2018（平成30）年は65人であり、割合としては2011（平成23）年2.8%から8.1%に増加していた。特に20歳代でみると2011（平成23）年23.0%であったのが、年々増加し、2018（平成30）年には72.9%となり増加がますます顕著であった。全国においても70.4%であり、20代の結核患者の7割を外国生まれが占める状況となっていた。日本語学校健診による患者の早期発見や医療通訳派遣事業などの患者支援が引き続き重要である。